

大学名：学習院大学

学部名：法学部

ゼミ名：藤田ゼミナール（藤田由紀子）

代表者氏名：前迫博樹

発表者氏名：飯村祐基 室賀大輝

参加者氏名：飯村祐基 栗田啓右 鈴木竜馬 新倉千紗都

藤本千鶴 前迫博樹 室賀大輝 涌井誠

「雪」と廃校を活かした観光招致

—「津南ブランド」発信の場としての夜市場構想—

梗概

津南町は積雪による豊富な水資源をはじめとした自然の恩恵を受け、魚沼産コシヒカリをはじめとする高品質な農作物を生産するなど、農業を主要産業としている自治体である。しかし、津南町やその農作物についての知名度は十分とは言えない。その他にも、少子高齢化とそれに伴う民生費の増加や周辺観光地との差別化の必要性、観光客数の時期ごと差や広報活動などの課題がある。一方で、「雪まつり」における「スカイランタン」等による集客の多さや新規就農者制度の充実などのように他の自治体にひけをとらない点も存在する。これらの津南の現状についてそれぞれ言及した。

それらの言及された課題を克服し、良い点を活かしていく場として、津南町の雪の恵みをうけた「雪下野菜」などの農産物を中心的な観光資源とする、休日の泊りがけの観光客へ津南町の魅力を発信する夜市場（よるいちば）を設立することを提言する。夜に市場を開催するメリットとしては、町内に夜間に観光できる場所が少なく、観光客を取り組みやすい点があげられる。

この夜市場においては、農産物の売買にとどまらず、津南町の農家と取引のある飲食店による出張店舗や津南町が誇る「スカイランタン」などの既存の観光資源の利用・その場で食材を味わえる環境の構築などを組み合わせていくことで冬季の観光客の呼び込み増加を目指す。施設に関しては、財政的な負担を抑えるため、既存の不利用の施設である廃校を利用することに着目した。また、主要な商品となる「雪下野菜」の生産量を増加させるため、そして、町の生産年齢増加のため、町や農家による新規就農者の支援等についても同時に言及した。

以上を踏まえて、既存のものを利用し、「観光」を足掛かりとした津南町の持続可能な発展を目指した。

はじめに

津南町は新潟県中魚沼郡に位置する人口 1 万人程度の自治体であり、国内を代表する豪雪地帯である。代表産業は積雪による豊富で質の良い水資源を利用した農業であり、「雪美人」や「名水の恵」に代表される「津南ブランド」と称される高品質の米や日本酒などは、市場にて高く評価されている。一方で、人口構成に目を転じると、全国的にみられる少子高齢化の波が例外なく押し寄せており、学校等の統廃合や予算における民生費の増加などがみられる。

主要な観光資源としては、夏季には一面に広がるひまわり畑が人気を集めている沖ノ原台地の「津南ひまわり広場」や、毎年 3 月頃に行われる「雪まつり」とそこで催される「スカイランタン」などのイベント、そして豊かな自然環境と体験施設を備えた「苗場山麓ジオパーク」などが挙げられる。また、町内には、様々な遊戯施設やスポーツ施設を備えた大規模なリゾート施設である「ニュー・グリーンピア津南」がある。以上のように観光面での魅力の多い地域ではあるのだが、首都圏からのアクセスの悪さや地域資源を観光資源化できていないことなどが原因で、周辺と比べると観光客数はあまり伸びていない。

このような現状に対し、私たちは廃校を利用し、週末の宿泊を伴う観光客をターゲットとする夜市場を設立することを提案する。この取り組みは、価値は高いが一般的な消費者の中で知名度の低い「津南ブランド」の農作物を宣伝し、観光客の間での周知を図るだけでなく、使用しなくなった廃校を有効活用することもあわせて目指すものである。以下、津南の現状と問題点や廃校等の利用について言及したうえで、私たちの提言を具体的に述べていく。

1 津南町の農業・観光の現状と課題

1.1 「雪」と農業¹

津南町は季節による寒暖の差が大きく、また、冬場に降り積もった雪からもたらされる良質な雪解け水が苗場山の腹流や中津川などを通じて豊富に手に入るため、非常に農業に適した環境にあり、雪は農業に欠かせないものとなっている。また、雪解け水のみならず「雪」そのものも、雪下ニンジンの生産や雪室を用いた農作物の保存などに利用され、農業の助けとなっている。

このような恵まれた環境の下で栽培された津南町の農作物は、品質が優れているとして高く評価されており、例えば津南町でも盛んに栽培が行なわれている魚沼産コシヒカリは、日本穀物検定協会が実施している食味ランキングによって最上級の「特 A」に分類されている。こうした津南町の農作物が持つ高いブランド力は、ふるさと納税を通じた納税額の多さからも見て取れる。津南町はインターネットを利用したふるさと納税制度を近年導入し、地元産のコシヒカリやアスパラなどを返礼品としたが、その結果、新潟県内において 3 位という高い納税額達成することができた。ただし、そもそもふるさと納税を行って

¹ この項目は、2016 年 8 月 8 日に行った営農センターでのヒアリングを中心に構成している。

るのは一部の層の人々で、その多くは商品そのものを目当てにしていると考えられるため²、このことが一般的な消費者にとって知名度が高いことを意味するわけではない点を留意する必要がある。

また、農業が閑散期となる冬季には、違う仕事をして生計を立てている農業従事者が多い。例えば、津南町で働く若者の中には、夏季にカサブランカの栽培、冬季にスキー場の従業員として働くといった例が見られる。

1.2 「雪まつり」と「スカイランタン」に代表される冬場の観光³

「雪まつり」とは毎年3月ごろに開催される行事であり、そのなかで行われるイベントの一つが「スカイランタン」である。「スカイランタン」とは、参加者達が夜空に合計1000個にも及ぶ灯籠を打ち上げるイベントであり、あたり一面の雪景色とあわせて幻想的な雰囲気を作り出されることから人気を集めている。2016年3月の「雪まつり」では、この「スカイランタン」を目当てに町の予想をはるかに超える観光客が会場を訪れ、それに伴って駐車場等が不足する事態が生じた。また、公共交通機関が遅い時間まで運行していなかったために、一部の観光客はイベントの最後に打ち上げられる花火を見ずに宿泊先や自宅に帰らざるをえなくなったほか、観光客のための宿泊施設が不足するなどの問題も見られた。

ただ、このような魅力的な行事はあるものの、津南町全体における冬季の観光客は多いとはいえ、むしろ沖ノ原台地のひまわり広場などが中心となって、夏季の方が多くの観光客を集めている。このことは、以下の図1に示した国土交通省発表の資料からも見て取れる。このグラフは、国土交通省が「雪国観光圏」として位置づけた地域（新潟県魚沼市、南魚沼市、湯沢町、十日町市、津南町、群馬県みなかみ町、長野県栄村の7市町村のこと）内の主な観光地における季節ごとの観光客数を集計した統計であるが、これを見てみると、「津南温泉・松山温泉地区」は他の観光地と比べて夏季の観光客の割合が比較的大きいことがわかる。津南町の宿泊施設に目を向けると、ニュー・グリーンピア津南以外では小規模の旅館しかなく、収容人数には現状制約がある。そのため町としても、すでに多い夏季の観光客をさらに増加させるのではなく、むしろ数の少ない冬季の観光客を増やしたいという意識を持っており、こちらの方が町の振興を行っていく上ではより効率的であろう。

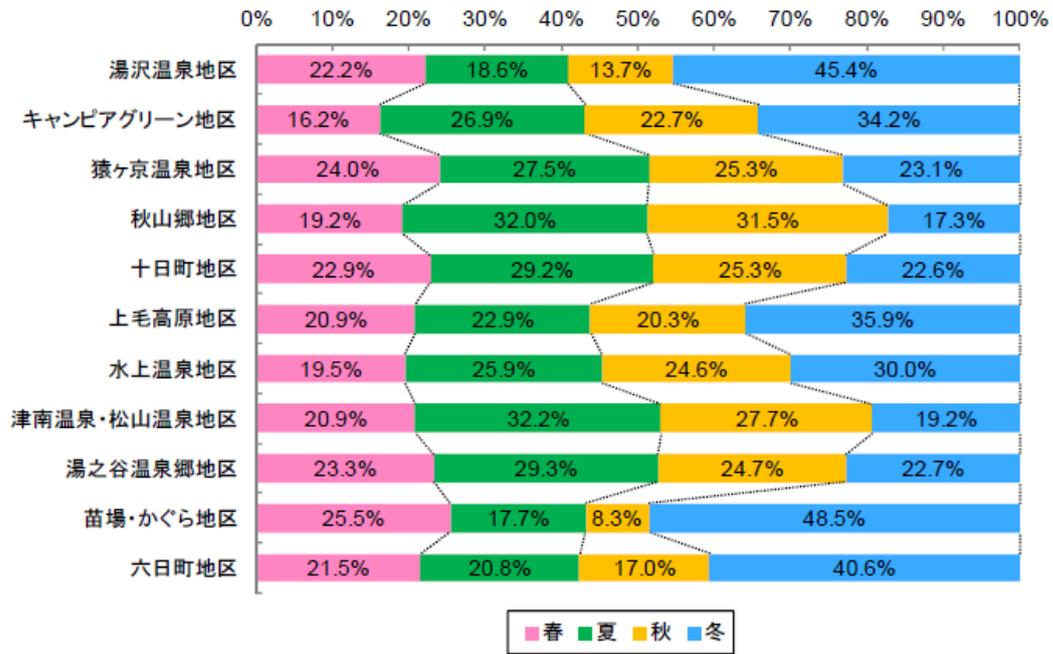
また、図2で示した観光客のエリア別滞在時間のデータを見ると、冬季におけるニュー・グリーンピア津南地域（ここでの表記は「キャンピアグリーン地区」⁴）の観光者は、平均で約1日半を同エリア内で過ごしていることがわかる。このことから、冬季の観光はニュー・グリーンピア津南地域の中で完結してしまっているという現状が類推できるだろう。それを踏まえると、ニュー・グリーンピア津南の宿泊客の収容規模や多機能性は活かしつつも、町内全体を観光エリアとしていくことが重要である。

² 2016年8月8日に行った津南町役場でのヒアリングより。

³ この項目は、2016年8月8日に行った津南町役場でのヒアリングを中心に構成している。

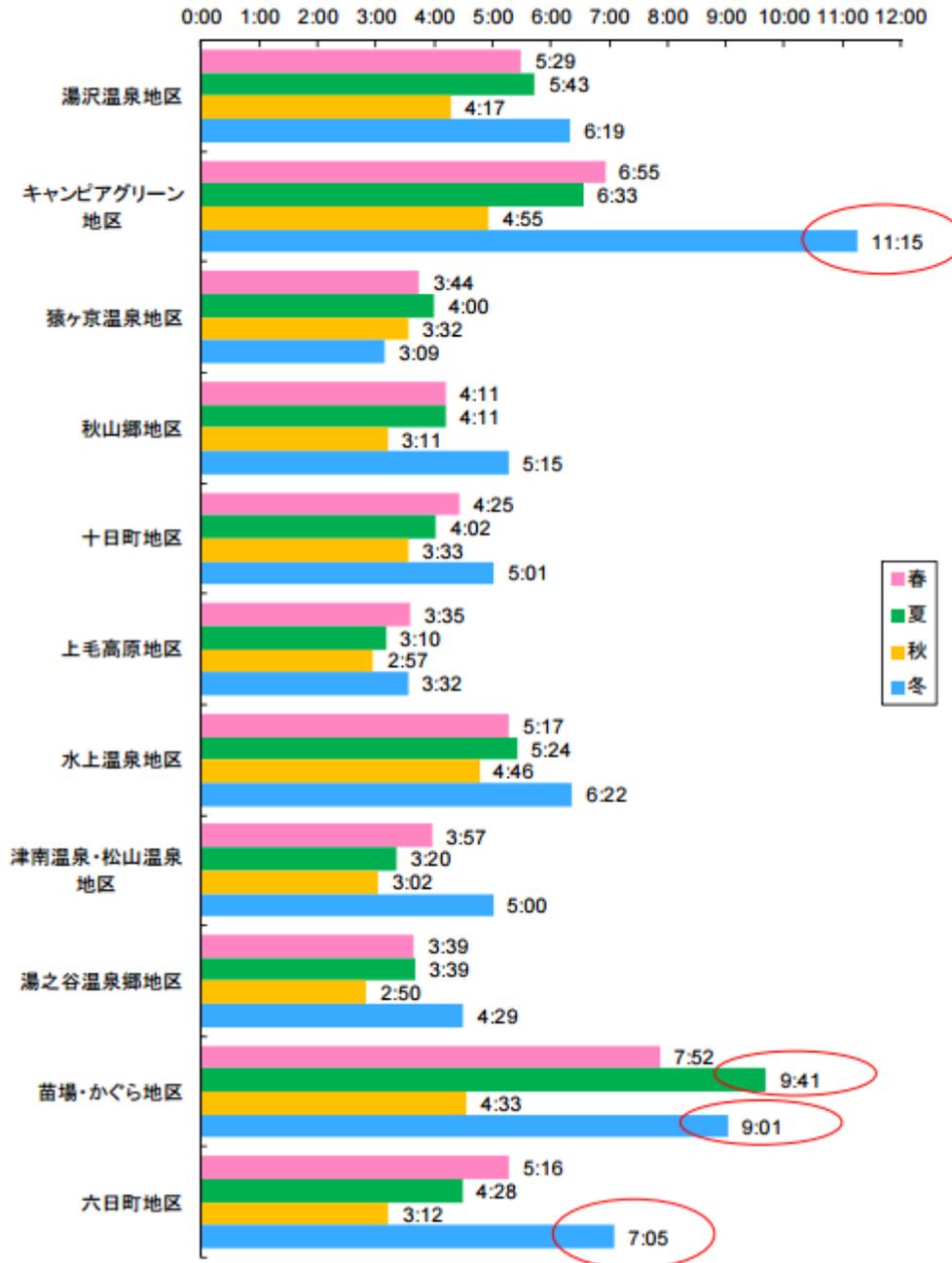
⁴ 「キャンピアグリーン」とは、ニュー・グリーンピア津南が保有しているキャンプ場のことであり、この「キャンピアグリーン地区」は、ニュー・グリーンピア津南周辺一帯の地域のことを表す名称である。

図 1：交流エリア別季節別延べ滞在者割合（2012年1月～12月）



出典：国土交通省「雪国観光圏整備計画」<http://www.mlit.go.jp/common/001045134.pdf>（最終閲覧日 2016/08/26）

図 2：交流エリア別季節別平均滞在時間（2012 年 1 月～12 月）



出典：観光庁「GPS機能による位置情報等を活用した観光行動の調査分析 報告書（平成25年度）」<http://www.mlit.go.jp/common/001045134.pdf>（最終閲覧日 2016/09/8）

1.3 観光地としての津南へのアクセス

既に述べた通り、津南町における観光客の宿泊拠点として最大規模のキャパシティを持つのが「ニュー・グリーンピア津南」である。宿泊を伴う津南町への観光は、この施設を拠点として行われる可能性が高いと考えられるため、今回観光地としての津南の交通事情を検証するにあたっては、「ニュー・グリーンピア津南」への首都圏からの交通アクセスを

分析の対象とする。また、観光客の出発地点については高速道路や新幹線などの交通の関係で「雪国観光圏」への観光客の5割以上が1都3県から訪れており、観光客の多くは首都圏から来る人が多いため、首都圏からの集客を前提とする⁵。観光客が同地を訪れるための交通手段として主に考えられるのは、以下の2つである。

- i .自動車・バスで、関越自動車道を利用したのち、国道353・117号を利用
- ii .越後湯沢駅よりバスを利用

これらの方法にはそれぞれ問題点がある。まずiの方法については、山地などの地理的制約のために高速道路を下りた後の下道区間で時間がかかり、首都圏から片道4時間ほどの移動時間がかかってしまうという点が懸念材料である⁶。ニュー・グリーンピア津南の東京への送迎バスを利用しても、一泊二日程度の滞在のために費やす移動時間としては長いため、この点は観光地としては大きなデメリットになるだろう。また、自家用車を利用して往復しようとする場合は、道幅が狭い場所やカーブの多い道など、慣れていない人にとっては危険な道を通らなければならず、路面が滑りやすくなっている冬季においては特に注意が必要になる。こうした点も、観光客から旅行先として忌避されてしまう要因になりかねない。

次に、iiの方法については、結論から言うところの手段を用いて津南を訪れる観光客はあまり多くないのではないかと推測される。なぜなら、この経路を用いる際に経由地となる越後湯沢自体が、津南町と同様の観光資源（スノースポーツの施設や温泉など）を備えた観光地であるためである。越後湯沢は、新幹線でのアクセスが可能かつ列車の本数も多いことから、津南町と比べると鉄道を通じた交通の便では明らかに優れている。そのため、鉄道を利用した新潟への観光を予定している人は、津南よりも湯沢の方を旅行先として選択する可能性が高くなるのではないかと考えられる。こうして見ると、同じような観光資源を持つ地域と比べて明らかに交通アクセスが悪い、という点は、津南町の観光が抱える問題の一つであると言えるだろう。なお、津南町内にはJRの路線（飯山線）が通っているため、これを利用して鉄道のみで津南町へアクセスすることも可能ではあるのだが、津南駅をはじめとする町内の駅は停車本数が非常に少ないため、あまり現実味のある選択肢とはいえないだろう。

ここまで見てきたように、津南町の観光は、交通アクセスの悪さという重大な問題を抱えている。とはいえ、もちろん可能な限り道路等を整備することは求められるが、移動時間そのものを縮めることには限界がある。そのため、津南町が行うべき観光戦略としては、よりアクセスのよい湯沢地域などと同じような観光資源で集客を図るのではなく、交通アクセス上のデメリットを補うだけの魅力を兼ね備えた独自の観光資源を整備することであるだろう。

⁵ 『GPS機能による位置情報等を活用した観光行動の調査分析報告書』、平成26年3月（観光庁）P134より

⁶ ニュー・グリーンピア津南のホームページで想定されていた新宿からの時間である。
ニュー・グリーンピア津南 <http://www.new-greenpia.com/> [最終閲覧 2016/8/23]

1.4 町内での観光手段

津南町内の各観光地はそれぞれかなり距離が離れており（例えば、前述した「ニュー・グリーンピア津南」と「津南ひまわり広場」は、およそ 9km 離れている）、また、津南町は河岸段丘と呼ばれる特殊な地形で標高差が大きいこともあって移動に時間がかかり、徒歩で町内の観光を行うのは現実的でないと言える。そして、前述のように町内の鉄道網は発達しているとは言いがたく、さらに町内を走るバスの本数も多くないという点も踏まえると、津南町での観光に際しては自動車等が必要であると言えるだろう。だが、町内の道路には道幅が狭い場所、一車線だけの場所が多く、慣れていない町外者にとっては通行が難しく、観光のハードルになる可能性がある。このことは、津南町と同様にスノースポーツや温泉などが有名で、より交通の利便性の高い湯沢地区へ観光客が流れてしまう一因ともなりうるのではないかと考えられる。よって、津南の観光を促進させるためには、こうした交通面の課題を解消するための工夫が必要になるだろう。具体的な取り組みとしては、観光バスの運行や観光地へのガイドを観光協会が積極的に行っていくことなどが挙げられる。

1.5 SNS を通じた広報の現状と課題

津南町観光協会がアカウントを設置し利用している SNS は、Twitter と Facebook の 2 種類ある⁷。Twitter のアカウントは、2011 年 6 月に開設された。しかし、5 年間での総ツイート数は 401 件と更新頻度はかなり低い。対外的に町の存在をアピールするためには、観光客等にとって魅力的な情報をより多く発信していくことが必要であろう。

一方で Facebook のアカウントは適宜更新されている。しかし、1 か月更新しないときもあれば、1 日に何件も更新するときがあるなど、その運用にむらがある。より有意義に活用するためには、イベント情報を定期的に告知する必要がある。モデルケースとしては、SNS を観光で活用している北海道・登別観光協会の Facebook が挙げられる。同観光協会は、週に 5 回以上・多いときは 1 日に数回更新をしている。その内容は、観光情報やイベント告知をはじめ、道路情報や各観光施設の臨時情報、おみやげおすすめ情報などと、観光しながらでもチェックしたくなるものであり、充実している。さらに近年では、新たな SNS ツールとして、写真をアップする Instagram が登場した。Instagram の利用者は 10 代や 20 代を中心に増加しており、風景やファッション、グルメの写真を共有することがブームになっている。若者の観光客を増やす工夫として、Instagram のアカウントを開設し、「スカイランタン」や季節ごとの風景をアップしてみることも考えられるのではないだろうか。

⁷ 津南町役場としては SNS のアカウントを有していない。

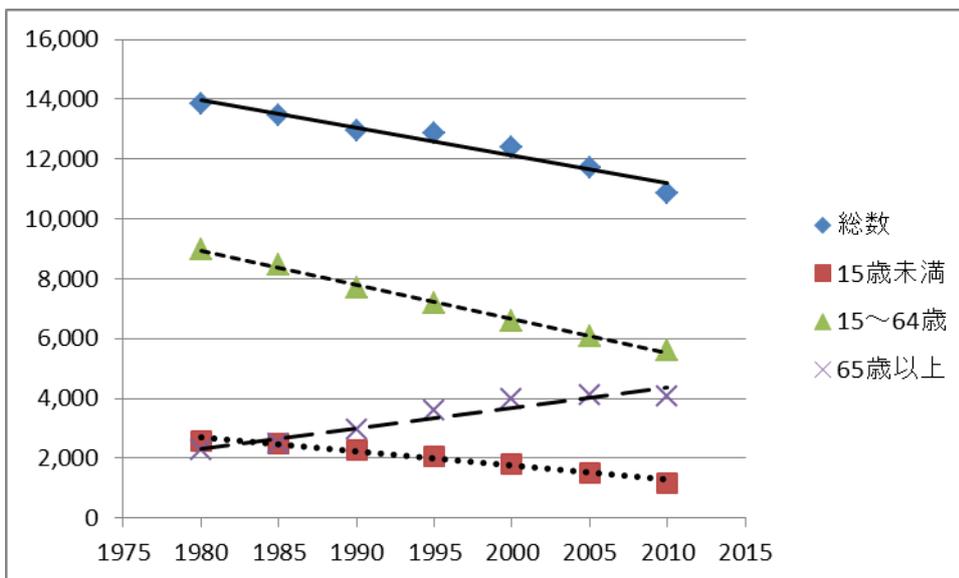
2 津南町の人口動態の現状と課題

2.1 人口規模の縮小と少子高齢化

津南町において、人口規模は減少傾向にある。下記の「グラフ：津南町の年齢階層別人口推移（1980年から2010年）」を見ると、人口の総数・15歳未満人口・15～64歳の人口は減少していることがわかる。一方で65歳以上の人口数は増加している。以上のことから、町全体として人口規模が縮小するとともに、少子高齢化が進んでいるといえる。そのため今後、社会保障費などの増加により財政面が圧迫されていくことも予想される。

津南町の『町勢要覧2015』の人口動態の推移の項目に目を向けても、社会動態が記載されている平成18年から平成26年まで毎年220人から330人ほど転出していることがわかる。一方で転入は180人から200人ほどであり、転入数を転出数が上回っている。町役場へのヒアリングによれば、転入の事由としては婚姻が多くを占めており、多い年齢層は20歳代から30歳代であるということである。

図3：津南町の年齢階層別人口推移（1980年から2010年）



（横軸：調査年，縦軸単位：人）

・平成22年国勢調査における、「年齢（3区分），男女別人口及び年齢別割合—都道府県，市町村（昭和55年～平成22年）」の数値を利用して作成

2.2 津南町の新規就農制度⁸

津南町は新規に就農を希望する人に対する支援制度が充実しており、新規参入者の受け入れ実績が多く、また農業への定着率も高い⁹。具体的な取り組みとしては、45歳以下の

⁸ 2016年8月8日に行った津南町役場でのヒアリング及び津南町ホームページ（<http://www.town.tsunan.niigata.jp/>）からの引用 [最終閲覧日 2016/09/14]

⁹ 研修制度や就農支援の一部（給付金等）は津南町独自のものではなく、全国的な政策である。しかし、それ以外の支援制度は津南町農業公社が中心となって行う取り組みである。津南町農業公社は平成5年10月15日に設立され、事業としては農業の担い手の育

就農希望者に対して行われている支援の数々が挙げられるだろう。45歳以下の就農希望者に対しては、もともと農林水産省が給付金などの支援制度を設けているのだが、津南町では国より先立って制度を整備しており、例えば就農希望者が津南町農業公社や地元の農家の下で栽培方法などを学ぶことができる研修制度がある。また、その他の就農支援として、関東などでのセミナーの実施や住居の斡旋、農地の取得や借り入れの斡旋、さらには農業機械の貸与や購入の助成など、津南町農業公社が中心となって様々な取り組みが行われている。

2.3 学校等の統廃合と廃校の発生

少子化のあおりを受けて、津南町では、小学校・中学校の統廃合が進んでいる。以下の表1にあらわされているように、平成11年から平成27年の間に小学校・中学校ともに学校数が半分となり、中には昨年閉校になったばかりの所もあった。また、町内に唯一あった新潟県立津南高等学校は2008年に閉校し、新潟県立津南中等教育学校が新たに設置された。これは、津南に高校に準ずる学校をなくしたくないという町民の声を受け、全国的に見られた文科省の中等教育学校設立の方針に手挙げし、採択されたことから実現した¹⁰。

廃校した小学校の津南町での利用例としては、三箇小学校での都内の小学生を対象とした「田舎体験」への利用があり、地域おこし協力隊¹¹の方も協力している。三箇小学校は地域おこし協力隊の事務所としても使われ、都会との交流事業の拠点となっている。また、新潟県と長野県にまたがる秘境秋山郷の小学校、「結束校」を改築して宿にした例もある。なお、結束校の改築は、三年に一度越後妻有地域（十日町市・津南町）周辺で開催される国際芸術祭である「大地の芸術祭」のための作品制作の一環として行われたものである。このような「大地の芸術祭」に関連した廃校のリノベーションは他の廃校でも行われており、これらを踏まえると廃校の利用のノウハウを津南町はある程度有しているといえる。とはいえ、廃校となった学校の多くは備品や文化財等の物置として使われたり、未活用の状態であったりするため、今後の活用が期待されるだろう¹²。

表1：学校の統廃合

	平成11年	平成27年
小学校数	8	4
中学校数	2	1
合計	10	5

津南町「町勢要覧2007」および「町勢要覧2015」に基づき作成

なお、小学校数には分校も含んでいる

成、農作業の支援、農用地の保全、農地利用集積円滑化事業を展開している。

¹⁰ 2016年8月8日に行った津南町役場でのヒアリングより。

¹¹ 一定期間過疎地域に居住し、地域おこしやPR、農林水産業への従事などの地域協力活動を行う隊員のこと。

¹² 津南町役場から頂いた廃校・廃園の活用状況の資料をもとに構成している。

2.4 廃校の利用事例

廃校の利用は様々な効果を生み出す。一つには未活用の土地や建物の有効活用ができ、コストを抑えられるという点がある。またそれに加えて、学校というものが地域コミュニティの中心を担っているため、廃校を活用することでコミュニティの再構築につながるというメリットもある。すなわち廃校の利用はコミュニティの衰退を防ぎ、地域活性化や地域協力にも期待できるのである。

ここでは、廃校利用の参考として、全国で行われている廃校の活用例を見ていく。

事例 1. 星ふる学校「くまの木」(栃木県塩谷郡塩谷町)¹³

「星ふる学校『くまの木』」は、熊ノ木尋常小学校として建てられた木造校舎をリノベーションした施設であり、NPO 法人「くまの木里の暮らし」が運営している。昔懐かしい学校に宿泊できるという魅力はもちろんあるが、栃木県塩谷町の文化や自然に触れる体験プログラムも充実しており、年間の利用者数の平均は 3700 人ほどにもなる。利用者の内訳は町内住民が 12%、県内住民 52%、東京都からが 9%、埼玉県からが 8%となっている。

事例 2. 間越海辺の村交流館「間越・来だんせへ市」(大分県佐伯市)¹⁴

「間越海辺の村交流館」は、佐伯市米水津にあった旧間越分校を利用した施設であり、その日に水あげされた魚介類の競りを誰でも参加できる形で実施するイベント、「間越・来だんせへ市」が毎月第三日曜日に行われている。また食事コーナーもあり、郷土料理や新鮮な魚介類を食べることができる。

事例 3. 「大野のごっつお大集合！」(熊本県山都町)¹⁵

「大野のごっつお大集合！」は、年一回熊本県山都町の旧大野小学校において開催されるイベントであり、その中では地元の家庭料理を試食することができる催し等が行われている。旧大野小学校は、この他にも稲刈り体験やブルーベリー摘み体験の会場となっていたり、カフェが設置されていたりするなど、観光施設として活用されている。

事例 4. 「やすらぎ交流館」(熊本県阿蘇市)¹⁶

「やすらぎ交流館」は、旧波野村立小池野小学校の校舎を増改築した宿泊・研修施設である。阿蘇・波野の自然や文化、農林業などに関する体験・交流活動を「なみの高原自然

¹³ 星ふる学校「くまの木」HP <http://www.shioya-kumanoki.com/>

[最終閲覧日 2016/8/22]

廃校リニューアル50選 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/03062401/frame-2.htm [最終閲覧日 2016/8/22]

¹⁴ 佐伯市の食・楽・泊・買・見をご紹介佐伯市観光協会オフィシャルサイト内 間越 来だんせへ市 <http://saiki-kankou.com/yonouzu/2016/03/981> [最終閲覧日 2016/8/23]

¹⁵ 『第3回大野のごっつお大集合!』開催のお知らせ <http://www.town.kumamoto-yamato.lg.jp/ijyuuhp/a0004/Oshirase/Pub/Shosai.aspx?AUNo=44&OsNo=9> [最終閲覧日 2016/8/23]

¹⁶ 阿蘇市波野やすらぎ交流館 <http://aso-yasuragi.com/> [最終閲覧日 2016/8/23]

学校」事業として実施しており、老若男女・団体個人を問わずに参加を受け入れている。

2.5 利用事例から得られることと、津南町への導入に関する検討

廃校を他の施設として利用している例は全国的に少なくない。既述の通り津南町も廃校の利活用をしている。しかし、それだけにとどまらず、津南町の魅力を活用していくために、廃校を大きな施設建設のコストをかけずに使える施設と捉えなおして、より積極的に利活用していくことは重要であろう。事例 2・事例 3 のような「食」を提供する場合は、農業と食文化が強みである津南町に応用できる可能性が十分に考えられる。また、「食」だけにとどまらず、事例 1・事例 4 などにもみられる体験型の要素を組み入れことも可能であろう。

3. 提言

3.1 津南が観光地としてさらに発展するための課題

津南町が観光地としてさらに発展していくために必要な課題としては以下のものが考えられる。

- ① 知名度の向上
- ② 財政的に無理のない観光資源の創生
- ③ 冬季の安定的な雇用
- ④ 地理的な距離の克服

まず①の「知名度の向上」という点については、これはすでに述べたように津南町の農産物の品質は高い評価を受けているため、この「津南ブランド」を知名度の高いブランドにすることを意味する。つまり、津南町の存在を知ってもらうという働きかけを行うことである。そのために必要になってくることは SNS を含めた積極的な情報発信や、観光客に津南町の農産品等を使った料理や食材を直接体感してもらうことである。

②の「財政的に無理のない観光資源の創生」という点については、これは、少子高齢化による社会保障費等の増加など、財政的に厳しい状況が生じている中で新たに一から観光施設や拠点を作ることは難しいと考えられるため、観光業の拡大を図る際には既存の使用しなくなった施設、例えば廃校等を利用したり、従来行っている「スカイランタン」などのイベントを応用したりすることによって、初期投資を最小限に抑えていくことが重要であるという指摘である。

③の「冬季の安定的な雇用」という点だが、これは農業の閑散期となる冬季にも安定的な雇用を生み出すことによって、各戸の安定的な収入を実現するということである。なぜなら、安定的な雇用が生まれることによって、観光客に対するサービスの質が一定水準に保たれると期待できるからである。また、安定的な雇用には若年層の流失を防ぎ、地域の縮小に歯止めをかけるという効果も期待できる。

最後に④の「地理的な距離の克服」というのは、物理的に交通アクセスを改善するのではなく、1.3 で述べたように津南町を交通アクセスの悪さを相殺するほどの魅力をもった観光地としていくことを指している。そのためには、周辺の越後湯沢などの地域と同じような観光資源(スノースポーツや温泉など)でもって競うのではなく、農産物の魅力等の津

南町が持つ独自の資源を使ってアピールし、差別化を図っていくことが不可欠である。

3.2 具体策：廃校を利用した夜市場の設立

津南町には、雪をはじめとする自然との共生を図ってきた歴史がある。また、町内で採れた農産物やそれを利用した特産品は、全国各地のものにも負けない高い品質を備えており、ブランド力を持っている。しかし、すでに述べてきた通り、十日町や湯沢といった全国的にも有名な観光の先進地に囲まれている影響もあって、津南町自体の知名度が低いのが現状である。津南町の観光地化、さらには定住に結びつけるには高品質な農作物を活用し新規就農への促進を積極的に行っていくことが必要である。そこで私たちは、津南で廃校を利用した夜市場を開催することを提案する。この夜市場を通し、津南町が持つ魅力である雪をはじめとした自然を活用した安全性の高い農作物等をアピールすることで、津南の魅力を多くの人に感じてもらうことが期待できる。

3.3 廃校活用のメリット

既に述べたように学校の統廃合は津南町において進んでいる。この結果として生じた廃校を町の主要産業である農業のさらなる拡大や観光業の発展のために役立たせようと考えたとき、津南町が持つ大きな魅力の1つである「津南ブランド」の発信拠点として利用していくことが考えられる。現在、津南町の廃校では地域おこし協力隊やNPO団体の廃校の利用も行われているが、未活用もしくは物置として利用している廃校があり、その利活用は十分可能である。

3.4 観光地としての津南夜市場

津南夜市場は、常設の市場として食材の売買のみでは終わらない。特に冬季における最大の魅力である雪とのコラボレーションが幻想的な観光スポットとして活かせる。夜に市場を開催するメリットとしては、津南町には夜に楽しむような観光地は他に少ないため、観光客を集めやすいと考えられることである。また「雪まつり」の際の「スカイランタン」と並ぶような新たなイベントも実施することができる。そうすることで、雪下野菜や特産品を扱う市場にとどまらず、雪を活かした幻想的な場所としても集客を望めるであろう。また「食文化」をアピールする催し物としては、休日の泊りがけの観光客をターゲットとして、たとえば土曜日の夜などに、津南町の農家と取引のある飲食店などに持ち回りで協力を呼びかけて出張店舗を展開してもらうことが挙げられる。これは津南の食材をその場で味わってもらおうという試みである。また、郷土料理教室や自然食を活かした料理コンテストなどを開催することで、観光客にとって、より身近に津南町の農産物の良さを知ってもらうきっかけになるだろう。

さらに、夜市場の開催は観光地としてだけでなく、夜市場を新規就農者が活躍する場として活用することも言及したい。なぜなら、観光客を増加させることは、直接的に、その裏付けとなる農業従事者の十分な確保につながるからである。

3.5 新規就農者の公募・定着

まず、津南町の公式HPで新規就農者の公募・SNSによる告知や宣伝を引き続き行って

いく必要がある。さらに、津南町の支援は手厚く、また農作物自体にも高い評価があることを現在以上に全面に押し出してアピールし、他の地域との新規就農者獲得の競争に負けないようにしていくことが重要である。また、津南町に新規就農を決めた人々に対しては、既存の農家による指導など町をあげて支援し、就農者の定着を図っていく必要がある。農業従事者の増加は「雪下野菜」などの生産量の増加や労働人口増加による活性化に結び付き、夜市場の安定的な運用を行うに不可欠である。

3.6 夜市場開催に向けて

農業就業者が増え、生産量が増加すると、売り込みを拡大していく必要が生じる。津南町の農作物は高品質であると同時に高価であるため、その販売促進についても対象を絞ったほうが効率的であると考えられる。具体的には、首都圏の比較的高級と分類される飲食店やホテル等との関係を深め、それらの店舗や施設との間で安定的な取引ができるようにするのが良いのではないだろうか。また、こうして築きあげられた協力関係は夜市場を開催する際に出張店舗の展開などを依頼する際にも重要になるだろう。そして、首都圏での取引先となる店舗において津南産農作物の評判が高まれば、口コミやマスコミ等を通して津南町という名前が周知される機会も増え、一般の消費者の間での認知度の向上も図ることができるだろう。

3.7 ニュー・グリーンピア津南との協力

津南夜市場の開催に伴いニュー・グリーンピア津南との協力が不可欠である。津南町への観光を行う場合、首都圏をはじめとした各地の大都市圏からのアクセス時間の長さを考えると、宿泊を伴うことは前提となる。よって、津南町を「観光地化」していくにあたっては、宿泊施設を確保することは必要不可欠な課題であると考えられるだろう。ただ、津南町にはすでに大規模な宿泊キャパシティを持つニュー・グリーンピア津南があり、「行動拠点」としての役割を有している。そのため、ニュー・グリーンピア津南と夜市場を含めた各観光資源地とを結ぶ移動手段を重点的に整備することによって、交通手段の不足を効率的に解消することができるだろう。

おわりに一夜市場を通して津南町が目指すもの一

持続的な町づくりをしていくためには、主要産業である農業のさらなる発展や移住者の増加、観光業の振興とその収益の増加が必要になる。夜市場は、津南町を知ってもらったり、農産物等の販促を行ったりするための機会となる。また、新規就農に対する公募と定着のための政策を通して、農業における労働人口を増加させ、町を若返らせていくことができる。ただし、新しい世代や新しい観光資源に伴って既存の施設や文化、組織と乖離あるいは無視することは望まれない。既存のものの魅力を活かしつつ、新しいものと組み合わせることが重要である。そうした形のなかで、津南町は現状の課題を克服していくべきであろう。